

- *ピリピの川岸にある祈り場に集まっていた女たちのうちの一人であった紫布商人ルデヤ。パウロの話に心が開かれてイエスこそ我が救い主と信じ、「彼女も、また、その家族もバプテスマを受けた。」（使徒16：15）ルデヤはピリピ教会の初穂となり、彼女の家がパウロたちの宣教の拠点となった。また、占いの霊に取りつかれた女奴隷がパウロたちに叫んでまつわりつくので、パウロはイエス・キリストのみ名によって悪い霊を追い払った。
- 聖書には書かれていないが、彼女は、恐らく主イエスを信じる者になっただろうと思う。ピリピ宣教において身分の違う二人の女性が大きな役割を果たした。
- *この女奴隷のことがもとで、パウロとシラスは鞭打たれた後、牢に入れられてしまう。そこに大地震が起きて扉が開いて足かせが取れた。囚人たちはこの時脱走してもおかしくなかったが、彼らは逃げないでパウロらのもとに集まっていた。「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」（ピリピ16：25）二人の祈りは恨みや嘆きの祈りではなく、謙虚で神への強い信頼が感じられるものであったと考えられる。
- また、神を心から賛美する歌声は他の囚人たちに大きな感動を与えたと思われる。この二人のもとにいれば大丈夫だと確信したのであろう。
- *看守は動転していた。「そして、ふたりを外に連れ出して、『先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか』と言った。」（16：30）今まで経験したことのない魂の危機に直面していた。ふたりの答えは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（16：31）あなたが救われれば、芋づる式に、自動的にあなたの家族も救われるわけではない。信仰はあくまで神と個人との関係のことであるから、あなたが信じればあなたは救われ、あなたの家族が信じればあなたの家族も救われるという意味である。
- *一家で一人だけがクリスチャンの人は、私の家では私しかクリスチャンがいない、と嘆くのではなく、私の家では先ず私がクリスチャンになったことを神に感謝し、家族全員が救われるように祈ろう。そのためにできる行動を起こそう。私たちの思いが実を結んで、救われる者が次々に起こされ、一緒に神のみ名をたたえ、喜び合う時が多く与えられることを願う。